

## 鈴木正信著 『日本古代氏族系譜の 基礎的研究』

東京堂出版  
2012年、536pp.

堀川徹

Toru Horikawa

島根県教育庁文化財課

古代文化センター / 特任研究員

本書は著者の最初の著書であり、2011年に提出した博士論文に加筆修正を行ったものである。構成は3部から成り、氏族系譜に着目し、その史料学的考察、またそれをツールとして古代氏族の実態を論じた書である。序章において用語の定義を行い、先行研究の検討から課題を抽出し、本書の概要を述べる。その中で本書での論点として、①「様式論」の検証②氏族系譜の「重層的構造」の明確化③氏族系譜の伝世過程の3点を掲げ、3部を通して論じる。

本書は論点が多岐にわたり、多面的に検討しているため、限られた紙幅で批評することは困難であるが、以下、序章を除き、各章ごとに要約した上で若干のコメントを付し、書評に変えたい。

第I部では、義江明子氏の「様式論」を検証するため、義江氏の分析の俎上に載らなかった系譜を取り上げ検討し、紀直氏の成立と展開過程を論じる。第一章「『紀伊国造次第』の成立とその背景」では、『国造次第』の史料的性格とその成立過程を論じ、その背景には9世紀における紀直氏、紀伊国造の展開過程が深く関連することを論じる。その際、国造と大領の兼帯慣行の存否の問題にも触れ、多面的に検討する。第二章「紀伊国造の成立と展開」では、紀直氏に関連する系譜の神代部分に着目し、同祖系譜の形成過程を論じ、紀直氏の成立、展開過程を導き出す。また、同祖系譜の形成過程と勢力の伸長をリンクさせて考察する。第三章「『紀伊国造系図』の成立過程と構成」では、『紀伊国造系図』を取り上げ、編者、系図の成立年

代、成立過程をその背景等を明らかにし、『国造次第』との性格の差異、関連性を論じる。第四章「紀伊国造と日前宮鎮座伝承」では、国家祭祀を受ける以前の日前宮への信仰について、日前宮縁起を用いて考察する。その中で、これまで指摘されてきた「農耕神」としての性格に加え、「航海神」としての性格を認める。

第II部では、溝口睦子氏の「重層的構造」に着目する視点を継承し複数の氏族を取り上げ、より明確に把握し、さらにはその氏族における系譜の歴史的意義を論じる。第一章「美濃国クルスタ地域と本巢国造」では、本巢郡栗田郷と大野郡栗田郷の現地比定を行い、同祖系譜を持つ美濃国造と本巢国造の関係性を検討する。そこから本来一体であったクルスタ地域が分割される背景を論じる。第二章「額田国造の本拠地をめぐる」では、額田国造の本拠地について様々な史料から再検討する。また、額田国造の存在形態から同祖系譜を論じる。第三章「美濃・近江の国造と同祖系譜」では、第一章・第二章を受けて、美濃・近江に存在する諸国造を取り上げる。『和邇部氏系図』を起点に展開する同祖系譜を検討し、その展開過程、7世紀後半における有効性について論じる。第四章「甲斐国造の「氏姓」と氏族的展開」では、甲斐地域に焦点を当て、甲斐国造の氏姓を多角的に検討する。また、中央氏族との関係性についても述べ、特に和邇氏との同族関係の意義と大伴氏との関係について論じる。

第Ⅲ部では、これまでとは異なる史料学的側面に焦点を当て、系譜の伝世過程、当時の人の歴史認識、再構築について論じる。第一章「紀伊国造の系譜とその諸本」では紀伊国造にまつわる系譜を、第二章「出雲国造の系譜とその諸本」では出雲氏にまつわる系譜を、第三章「大神氏の系譜とその諸本」では大神氏にまつわる系譜を取り上げる。第一章・第二章については、それぞれ現存する系譜を網羅的に調査・検討し、いかにして後世に伝わってきたか、写本系統を論じる。第三章については、伝わる系譜の関係性について論じる。三章にわたる検討から、氏族系譜が伝世していく際には蓄積と洗練という2つのパターンによりバージョンアップされていく傾向を論じる。

終章では、これまで論じてきた点を確認し、序章で示した3点の問題点を改めて論じる。

本書の評価点として、第1には、取り上げた氏族系譜の史料性を確定させたことである。実物を調査し、詳細で緻密な分析を行っており、氏族系譜の解釈は基本的に妥当であろう。その上で、これまでなかなか日の目を見なかった氏族系譜類について翻刻を掲載するなど、そういった意味においても評価すべきであろう。

第2に評価すべきは、氏族研究の方法論の1つとして氏族系譜研究の有効性を明確に示したことである。氏族系譜をツールとして個々の氏族の展開過程を論じた点は評価すべき点であろう。そのため氏族研究の観点から本書を捉えても十分価値が高いものといえよう。

第3に評価すべきは、古代史に軸足を置きながら通時代的に氏族系譜を捉えたことである。氏族系譜の研究といえども、古代史の枠を超えることはそう簡単なことではない。通時代的な視点で捉えたからこそ、史料性など、明らかになった点が多いと思われる。

続いて、本書を通じて思った疑問点をあげる。第Ⅰ部を通じて疑問に思ったのは、「私的な系図」と「公的な系図」についてである。本書において「私的な系図」とされた『国造次第』は、編者が疑問とされた箇所をそのまま記している。これは著者も述べるように、現状本の底本にすでに記されていたとみてよいだろう。つまり、現状本の底本が成立した天正年間ではすでに「『国造次第』が不完全なものであることを自ら吐露しており、ややもすればその史料の価値をおとしめかねない」(32頁)のものであった。一方で広世が貞観16年に書写した段階では「国造たらしめる正統性の根源として機能した」(56頁)と述べる。これは氏族系譜が持つ意義が、時間の経過と共に変化していく様を表している。現状本が成立した天正年間においては「あくまで国造家内部のごく限られた人々が利用することを前提として」(125頁)作成されたのであれば、天正年間において地位継承次第としての役割を持っていたかは改めて考察する余地があろう。著者は注記の検討から、「私的な系図」として注記がなされたのは12世紀末頃と推測されているが(38頁)、そのように考えるならば、12世紀末頃にはすでに正統性の根源としての意義は薄れていた可能性がある。また、第Ⅲ部において大神氏の系譜を検討しており、『大神朝臣本系牒略』の成立には「記録にとどめておく必要性を感じ」(411頁)たことが背景の1つとしてあったとする。このように、氏族系譜の意義についてはそれを取り巻く環境の差異に基づく氏族系譜のもつ意義の差異や、成立後の歴史的变化が読み取れるのであり、その点も考慮すべきであろう。つまり、地位継承次第という概念に矮小化されるべきではなく、その背景にある歴史認識や思想の変化をも含みこんだ枠組みの考察が必要に思う。

上記に関連して、氏族系譜の持つ意義についても言及が欲しかった。氏族系譜が成立する背景に

については詳細な検討が加えられているが、氏族系譜が地域社会にいかにして作用したのかという点も今後必要とされるだろう。更に言えば、「歴史認識」、「記憶」の持つ、歴史学に対する可能性について議論することは必要だろう。

第Ⅱ部においては、「不変性」「可変性」を含みこんで「重層的構造」が作られていく様を明確に示した。しかし、同祖系譜の意義が和邇氏側の論理でのみ論じられているのは不満が残る。和邇氏にとって同祖系譜を結ぶことに意義があったことは十分理解可能であるが、同祖系譜が地域社会レベルでどのような意義があったのかという点も同祖系譜を論じるうえで重要な論点となろう。本書の説明では、同祖系譜は結果論的理解にとどまってしまう可能性がある。地域社会レベルで作用しうるのか否かを含めてこの点に言及すべきであろう。この点は言い換えれば先述した、歴史認識が地域社会にもたらす影響とも深く関連する。

ここまで縷々述べてきたが、ないものねだりの感が強い。『日本古代氏族系譜の基礎的研究』と題された本書の責務は十分に果たされているといえ、ここまでの批評は決して本書の価値を落とすものではないことを記しておく。評者の力不足により、論旨の誤読誤解があったのではないかと恐れるが、ご海容願いたい。著者の今後の研究の進展を期待し、拙い書評を終えることとしたい。

